

現代の子どもを取り巻く環境と地域の役割を考える
～発達支援から考える子どもの育ち～

講師 永沢佳純氏（千葉リハビリテーションセンター小児科医）

1. 「困った子は実は困っている子」

発達障害の外来の主訴で1番多い例として「言葉が遅い子」が挙げられる。1歳半健診で言葉が遅いとチェックが入ることになっているが、それですぐに言語の訓練には入らない。それぞれ個人差が大きいのでそこでは様子見ということになるが親としては何もせずについて良いのか心配になる。

では、言葉が遅いのはなぜか？

まず聞こえているのかどうか？ 呼びかけても返事がない場合に聞こえているかどうかを知りたいければどうすればいいかという、その子の好きなものにまつわる音を視覚情報がなく音だけでどう反応するかをみると聞こえを判断できる。ここで聞こえていなければ、耳鼻科に相談に行ってもらいたい。

もし、聞こえていたとして、次に言葉以外の発達の遅れはないか、運動面（粗大運動、手先運動）はどうか、言葉以外のコミュニケーションをみる。

コミュニケーションとは、「①社会生活を営む人間が互いに意思や感情、思考を伝達し合うこと。言語・文字・身振りなどを媒介として行われる。②動物どうしの間で行われる、身振りや音声などによる情報伝達」（デジタル大辞泉より）をいう。

言語コミュニケーションを伴わない非言語コミュニケーションについて、ジョルジュ・ド・ラ・トゥール作の「いかさま師」を見ると目で合図している。また、喃語を使った双子の赤ちゃんのコミュニケーション動画「Talking Twin Babies」でもいろんな非言語コミュニケーションがとられている。

非言語コミュニケーションはアイコンタクト、指差し（要求）、指差し（興味の共有：相手が見てくれているか確認）、相手が指さしたものを見る、相手が見た方を見る、などあるが、通常1歳半までに見られる。言語コミュニケーションは、単語、二語文、多語文、質問応答とありこちらは個人差が大きい。

非言語コミュニケーションの遅れなしに言葉だけが遅い場合、言葉を引き出すにはどうしたら良いか？ この場合子どもにとって「話す必要がない状態」になっていないか考えてもらいたい。何でも先回りして欲しいものを察知して渡したり、危険の無いようにやりたいことをやらせないということが行き過ぎていないだろうか。その場合には、あえて「勘が悪いふり」をすることが必要。そうすることで子どもは自分の要求を叶えるために言葉を使い始めるようになる。大人が子どもに話しかけるときの工夫も必要で、要求のもの名前一語から話し始めると良い。



では、言語と非言語両方のコミュニケーションが遅い場合はどうか。

運動面には遅れがなく、聴覚の問題もないのに、言語と非言語の両方のコミュニケーションに遅れがある場合、どのようなことが考えられるか。

・ 一人遊びが好きで、人とあまり関わらない子

例えば、人より物に興味が強いの、一人で繰り返し遊ぶのが好き（変わらない物に対して安心感）と一緒に遊びたがらない場合、どうやって人と関わるようにしたらよいか。

人との関わりが少ない子が人に興味を持つためには、人と一緒にいると楽しいこと、良いことがあると気づいてもらう。その子の好きなことは何か、人と一緒に楽しむことは何かをまず観察する。注意や指示ばかりをされていると嫌になってしまうので、それ以上の楽しい経験の共有が必要。

・ 落ち着きがない子

子どもがスーパーの中で走ったとき、あなたが親だったらどうするか？ よくあるのは、親は「走ったらダメ」と叱る。子どもは一旦走るのをやめてもまた走る、これはなぜか？ スーパーで走り回るのは子どもにとって買い物自体が楽しくないから。子どもの場合、広いスペースがあって走りたいたのであって、走って人にぶつかるか陳列されているものを倒す可能性は考えていない。

もし子どもが「落ち着きがない子」だったら、その子は叱られることが多い。親子の関わりのお大半が「叱る」「叱られる」の構図となるが、その子どもと親はどうなっていくか。

子どもの行動→叱る→へこむ・反抗する→子どもの自己肯定感低下→親の自己肯定感低下→親子の関係悪化→子どもの行動…これが延々と繰り返される悪循環となる。親としてこの流れを断ち切るにはどうしたらいいか。親に変えることができるのは「叱る」の部分だけである。

では、具体的にどう変えていくかという「ペアレントトレーニング」の手法を取り入れる。

子どもの行動を「好ましい行動（増やしたい行動）」「好ましくない行動（減らしたい行動）」「許しがたい行動（止めさせたい行動）」の3種類に分ける。

次に、具体的な行動を書き出し（ここでは形容詞ではなく動詞で書く）、その対応も3種類に分ける。

「好ましい行動」に対しては「ありがとう」と言う（ただし心のこもらないのは×）。「止めさせたい行動」は制止したあとなぜその行動をしたのか理由を考えて対策を講じる。「好ましくない行動」は「あなたがそれを止めるのを待っているよ」というメッセージを込めて待つ（ただし、険しい表情は×）

	好ましい行動	好ましくない行動	止めさせたい行動
行動	買い物のときに頼むと荷物を持ってくれる	買ってほしいものがあるときに駄々をこねる	気に入らないことがあるとき石を投げる
対応	心を込めて「ありがとう」と言う	「あなたが止めるのを待っているよ」というメッセージを込めて待つ	制止する なぜ石を投げたか理由を考えて対策を講じる

なぜ子どもの行動を3種類に分けるのかというと、大人は、普段子どもがしている「好ましい行動」

に対して意外と注意を向けていないことが多い。何か悪いことをしたときにはすかさず子どもに注目して、それが「好ましくない行動」でも「止めさせたい行動」でも叱ることが多い。叱られることばかり多いと子どもは叱られ慣れていき、大人もまた叱るパターンにはまっていき悪循環となる。3種類に分けて対応することの意味は、子どものしている「好ましい行動」を思い出しておくことで、それが起きたときに良い注目を与え対応することができる。また、「好ましくない行動」と「止めさせたい行動」を分けて対応することで叱ることを減らすことができる。このようにして悪循環を減らし、好循環が増えて親子関係が良好になると、子どもの問題のある行動は減っていく。

○指示の出し方・伝え方 (CCQ)

指示の出し方・伝え方としては、穏やかに (Calm)、近づいて (Close)、静かに (Quiet) がポイントとなる。遠く離れたところから「早くしなさい!」と怒ったような口調で指示を出しても、子どもは大丈夫と思ってすぐ反応しない。そうすると親はさらに語気を強くして叱るというパターンになりがちである。

○予告をすること

子どもに心の準備をさせるために5分前に声かけして予告することが必要。

○選ばせて良いものは選ばせる

自分で選ぶことでいくらか気持ちが前向きになるかもしれない。選ばせて良いものは「どっちにする?どっちでも好きな方でいいよ」と選ばせることで、「なんでも親にやらされる感」が薄れて、子どもは親が自分の意見を尊重してくれたように感じる。

○交換条件

何か気の進まない行動も、終えたら嬉しいことがあればすんなりとできるかもしれない。例えば「宿題が終わったらゲームができる」という褒美の形であって、決して「宿題しないとゲームができない」という罰ではないということ、その違いを理解する。「キーキー言うなら聞きません」と怒った口調で言うのではなく、「落ち着いて話したら聞くよ」と穏やかに言うことが大切。

○手伝い

その子がしてくれそうな手伝いをその子がしてくれそうなときに頼む。そして手伝いをしてくれたら「ありがとう」と言う。さらにその話を他の人に聞かせることで褒めを倍増させる。

以上のような対応をするには「親の方もコンディションを整える」ことが必要になる。

たとえば、仕事が忙しくて時間の余裕がなかったり、心配事(夫婦喧嘩、家計、介護)があったり、「ワンオペ子育て」(※「ワンオペ」とはワンオペレーションの略で、様々な理由により1人で子育てをしていること)で気持ちの余裕がなかったり、女性の場合は月経周期に合わせた気持ちの浮き沈みやイライラなどがある場合もある。こういった場合、立場の弱い子どもにしわ寄せがいくことがある。子どもが同じことを言っている、こちらの機嫌で許したり叱ったりになってしまいがち

である。

・ 激しいかんしゃく、パニックを起こす子

2～3歳頃の子どもは「イヤ」と強く自己主張することが多くなり、思い通りにいかないと泣いたりかんしゃくを起こす。程度の差こそあるが、かんしゃくは成長過程の1つである。

「パニック」とは激しい興奮状態なので、パニックになったときには怒ったり一生懸命話しかけると余計に長引いてしまうので、放っておくしかない。パニックになったときにどうするかではなく、なぜパニックになったのかに注目して、パニックにならないようにすることを考えたほうが良い。眠気や暑さからくる生理的な不快、感覚過敏、見通しが持てないことによる不安感、要求がかなわないこと、何が原因なのかを考える。もし眠気が原因ならば、睡眠リズムを整えること、暑さが原因ならば暑さ対策をすればよい。

要求を叶えたくてパニックになったとき、最も良くない対応は、親が周囲の目を気にして、もしくは根負けして要求を通してしまうことである。「望ましくない行動」には褒美を出してはダメ（要求が通らない→パニック→要求が通る→パニックは有効！と思った子どもはまたパニックを起す）。正しいことを教える必要がある（パニック→親が知らんぷりして要求が通らない→もうちょっと派手にやってみよう→それでも要求が通らない…を繰り返すと子どもはパニックは無効だからもうやめようと思う）。

ここで、先ほどの睡眠の話になるが、本来の人間の体内時計は25時間のサイクルで、1日の地球時間（24時間）とズレている。体内時計を地球時間に同調させるためには、「朝昼は明るくにぎやかに、夜は暗く静かに」が必要だが、日本の夜は明る過ぎる。例えば、夜でも煌々と電気がついているコンビニエンスストアやフードコートで、夜9時過ぎに小学校に上がる前の子どもや赤ちゃんを連れてくる人を見ることがあるが、これでは体内時計が混乱してしまい、睡眠覚醒リズムの崩れにつながる。日本では、夜10時以降に寝ている3歳以下の子どもが40%近くいるがこれは不自然な事。

体温も1日のなかで変化する。目覚める直前から体温は上がり始め、体温が下がり始めると眠くなる。子どもは眠くなると手足がポカポカしてくるが、これは体温がピークに達したあとに放熱を始めたということであり、眠りに落ちやすい時間であることを意味している。眠くなる直前に熱いお風呂に入れてしまうと体温が上がってしまい、眠るより起きることに適した状態に体が準備されるため、お風呂の時間も含めて放熱の時間も確保し眠りのリズムを作る必要がある。睡眠が足りていないと、イライラ度が上がり、注意力・集中力は下がる。睡眠に必要な時間はその子それぞれで、毎日だいたい同じリズムで生活できるようにすることが大切。

2. 親の関係を考えるときに大切なものが「アタッチメント」（愛着）

アタッチメント（愛着）とは、他者とのつながりを求めて安心を得ようとすることで、安全が脅かされるとアタッチメントシステムが活性化する。「疲れたとき」「眠いとき」「お腹がすいたとき」「養育者と離れたとき」「病気になったとき」にアタッチメントシステムが活性化して、「守ってほしい」「なだめてほしい」「気持ちを受け入れてほしい」と思い、養育者に近づいていく。そのとき養育者の反応が、

子どもの気持ちを受け止めてあげる（抱っこ、共感の言葉かけ）とアタッチメント形成が良好となる。一方、子どもの気持ちに気づかなかったり叱ったりしてしまうと、アタッチメント形成は不良となる。探索行動をしているときに大人が見てくれていると子どもは安心して行動するようになる。

子どものアタッチメント行動に対して養育者がどのような反応をするかは、子どもが社会的・情緒的に健全な発達を遂げるために重要である。アタッチメント形成が悪いとストレス耐性が低くなり、感情のコントロールや他者との関係を築く能力が発達せず、辛い経験がトラウマになりやすい。ラットによる実験では、ケアの良いラットに育てられるとストレス耐性が高くなり、ケアの悪いラットに育てられるとストレス耐性は低くなった。

3. 日本の親子を取り巻く現状

（1）少子化

1950年から2014年で子どもの数は半数近く減少。子どもの割合は、35.4%から12.8%に下がり、大人2人に対し子ども1人だったものが現在は大人7人に対し子ども1人の割合となっている。このため、地域で遊ぶ子どもが減っている。

（2）兄弟姉妹数は減少

兄弟姉妹の数の推移（1940年～1992年）を見ると兄弟姉妹が減ってきていることがわかる。西日本は比較的兄弟姉妹が多いが、関東・都心部は兄弟姉妹が少ない。

この影響として、親側は、子どもの発達の段階が大体こんなものというところがわからなくなってしまい、子どもへの要求水準が年齢相応でなくなる可能性でてきた。兄弟が多いとそれぞれの子どもの得手不得手がなんとなく分かって与えていたものが、子どもの得手不得手に関係なく親が与えたいものを与えてしまう可能性がでてきて、親の期待を少ない子どもが一身に受けることになる。

子ども側は、昔は親が家事をしている間、上の兄弟に下の子の面倒を見させていて、上の子は下の子を連れて遊びに行っていた。このようにして異年齢の子どもたちが一緒に遊ぶときには、集団の中で低年齢の子どもへの配慮（おみそ）があった。自分とは違う相手と一緒に過ごすために子どもが知恵を働かせることがかつては日常的に行われていた。現在は異年齢の子どもたちが集団で遊ぶ機会が減って、社会性が全体的に低下しているという。

（3）核家族化

1968年から2009年で核家族数が倍増している。核家族とは、「①夫婦とその未婚の子ども、②夫婦のみ、③父親または母親とその未婚の子ども」と定義されている。核家族化の影響として、子どもと一緒に見てくれる大人が少ないため、親が疲れたときや体調不良のときに負担が大きく、子育てに不安を感じやすい。しつけや教育に親の影響が大きく、行き過ぎたしつけになったり、反対に必要な社会性が身につかなかったりする可能性もある。このように、核家族では親の子どもへの影響が大きいことや親の孤立化が問題となると思われる。

(4) 子どもの貧困

そもそも「貧困」とは、2012年時点で日本の貧困ラインが、個人122万円、親子2世帯173万円（月額約14万円）、親子4人世帯244万円（月額約20万円）であるが、それを下回る世帯のことである。そういう子どもたちが6人に1人の割合となっていて、ひとり親世帯では過半数を占めている。この貧困の影響として、不十分な衣食住、親の長時間労働、親のストレス、子どもと触れ合う時間の短さ、虐待・ネグレクトのリスクが上がる、子どもの学力低下、さらに貧困の連鎖がある。

児童相談所が対応した子どもの虐待件数も年々増えている。最近の日本は、近所づきあいが減って近所に住んでいる人がどんな人かよくわからない。親が子どもをよく怒鳴っていて、子どもが泣いているとその親と話をすることなくすぐに虐待通報する場合もある。それは「見守られている」のではなく、「見張られている」感覚になってしまう。本当は通報する前に声かけなどできないかと思う。

このように、子どもを取り巻く環境の変化として子ども全体の社会性が低下している可能性がある。子育て環境の変化として、相談相手が少ないなかで親の不安が増大しやすい可能性がある。

4. 地域の人はどう関われるか

(1) 学習支援（地域の子どもの貧困対策）

2010年ごろから広がりを見せ、2009年からはじまった「子どもの健全育成支援事業」や2015年からはじまった「生活困窮者自立支援法」のなかに助成制度があり、それらの国の助成を受けているものもあり、助成を受けずに草の根的に支援している団体も存在している。「無料塾」とも呼ばれている。

(2) 子ども食堂

主に貧困家庭や孤食の子どもたちに無料や安価で食事を提供する民間の取り組み。2014年に子どもの貧困率（6人に1人）が発表され全国で開設数が急増し現在は300箇所を超えている。開催頻度は月1回が全体の4割で最も多いが、週5日以上というところもある。

「無料塾」も「子ども食堂」も、ただ単に学習のサポートや食事提供をするだけではなく、子どもに何かあったときに相談できる相手がいる場所、安心できる居場所、子どもと地域の人とのつながりが生まれる場所となっている。

5. 映画「みんなの学校」を紹介

映画「みんなの学校」は、大阪市立南住吉大空小学校（公立校）の1年を追ったドキュメンタリー映画。2015年2月に上映し、その後も各地で上映会が開催されている。

～以下、あらすじ～

大空小学校は、2006年4月に開校し、2015年3月まで大村泰子先生が校長を務めた。学校が目指す

のは「不登校ゼロ」。特別支援学級適の子どもを普通級に入れて、支援学級の担任も普通級に入り、すべての子どもが同じ教室で学んでいる。ここの評判を聞きつけて支援を要する子が校区内に引っ越してきていて、2012年度には児童数約220人のうち、特別支援の対象となる子は30人を超えた。

大空小学校の唯一のルールは「自分がされて嫌なことは人にしない、言わない」。子どもたちはこのルールを破ると「やり直しの部屋」(校長室)に行くことになる。

■4月に転校してきたセイシロウくん(4年生)

前の学校で入学してすぐ大声を出したり同級生を叩いたりして特別支援学級へ、以後3年間担任と2人きりとなった。午前中の2時間もてばよい方で、友だちができないことを心配した母がいくつもの学校を見学し、大空小学校へ転校してきた。転校当初は、同じ年頃の子の中に入って授業が終わる午後3時半まで帰れず、疲れて校長室で眠っていた。朝から帰る時間まで1日学校で過ごすことはセイシロウにとって大変なことであった。

あるときセイシロウが脱走した。この日、超マイペースなセイシロウは算数の時間にダンボールで恐竜を作っていて勉強はしていなかったが、それでも3時間目の後半から機嫌が悪くなっていった。「僕は、大空小学校を引退します」「今から学校を爆破します」「脱走します」。脱走するセイシロウを学務員が追いかけて連れ戻した。校長は「セイはいるだけで100点」と話す。

同級生のキョウスケは校長に「先生、セイは障害があるんか。それやったら俺、がまんする」と聞いたが、校長は「それはわからないなあ。でも一つ秘密を教えたら。キョウスケとセイの日本語は少し違う。理解できなくて一番困っているのはセイや。セイにも一つだけ通じる言葉がある。『大丈夫?』しばらくはそれ以外言うたらあかん」と返した。

また脱走して校庭に座り込むセイシロウ。校長先生は同級生のリョウジに「セイを教室に連れてきて」と声をかける。リョウジがセイに「教室に行こう」と言うが、「いやや、アホ」と拒絶する。しゃがみこむセイの背中をリョウジがさする。校長室で校長が「リョウジがセイの背中をさすってくれたん、気いついてたか?」と聞くと、セイシロウは「気いついてなかった」。校長は「セイは友だちのことを信用せなあかん」と話した。

大空小学校では「障害児」という言葉は使わない。子どもは相手を「自分と違う」と理解することから友達になる。障害の有る無しで分ければ、理解じゃなくて我慢になる。我慢から友だち関係は始まらない。

■不登校で転校してきたユヅキくん(3年生)

1年、2年と不登校で大空小学校に転校してきた。ユヅキは前の学校からの申し送りで「すぐにキレて暴力をふるい自分で何かを考える事ができない」ということのほか、いかに扱いにくいかが伝えられていた。転校時に校長は教職員にその情報を伝えたが、「これはあくまでも前の学校の見立てです。先入観なしで自分の目で見ていこうな」と話した。

全校集会で校長から子どもたちに「ユヅキさんはこれまで、みんなのように毎日学校に行くことはできませんでした。ユヅキさんのことは、みんなが自分の目で見て、理解してください」と紹介した。

1日、2日、3日と過ぎていったが、ユヅキに何ら変わった様子は無く、友だち一人ひとりの自己紹介に対し、「宜しく願います」と丁寧に応じ、休み時間も皆と一緒に遊び、周囲に溶け込んでいた。

ところが、転校してきてひと月ほど経ったころ、ユヅキが初めて教室を飛び出した。自分の考えを書く課題があり、「わからん」と書いたユヅキに、隣の席のコクドが「わからんと書いたらあかん」と注意したのが原因だった。

校長は、ユヅキを連れて教室に戻り、クラスの子に「ユヅキは1年、2年と学校に全然行かれへんかってん。コクド、ユヅキはわからんからわからんて書いた。それはユヅキにとって正解。わかっているコクドは、わからんユヅキを助けなあかん」と話した。「ごめんね」というコクドに、ユヅキは「いいよ」と返した。

校長は、コクドにとって自分と他人との違いを知って違いを受け止めることを学ぶ良いチャンスと思った。ユヅキは物事を非常に論理的に捉えるところがあり、さらにそこに強いこだわりがある。それまでユヅキは、母親から自分は「発達障害がある」と聞かされていた。難しい場面に出くわすと、「おれ、発達障害やから、できへん」と言い訳することがあった。

ユヅキは、自分の言葉を持っている賢い子だった。友だちとこじれると「これはこういう理由でこうなったから、僕は悪くない」と、よく言えば理路整然と説明する。悪く言えば理屈をこねるところがあった。上から押さえつけたいタイプの大人が最も手こずる子どもかもしれない。大人が勝手にジャッジすると、どこまでも暴れる。

ユヅキはこれまで自分の語るすべての言葉を周りの人達から否定されたと思っている。だから余計に頑なになり、どこまでも自分を主張する。そして「周りの子と違っておかしい」と受け取られる。大人がジャッジすることをやめて、おかしいことを言ったなと思ったときに否定はせず、「そこ、よくわからんから教えて」と聞いていくと自分で気づくようになる。

セイシロウもユヅキも前の学校では不登校だったのに通えるようになっていった。

■特別を捨てた支援教育

診断があろうとなかろうと、支援の必要な子どもはたくさんいるが、支援に「特別」という言葉がつくと特別扱いして、切り離さなければならない感覚になってしまっていないか。「この子と一緒にやるのは無理」と考える学校もあるが、大空小学校では「どうやったらこの子と一緒にやれるか」を考えている。

その子とその子らしくいられることが一番大事で、「その子らしさの質を上げる」ことを目指す。その子の現状のままでいいということではなく、現状をまず受け入れること。受け入れてから、その子が変化していくと変化に応じて働きかけを変えていく。子ども同士が学びあい、その子も周りの子も育っていく。

■大空小学校の全校道徳

月曜日の1時間目は、毎週テーマを決めてみんなで話し合う「全校道徳」の時間となっている。1年生から6年生の子どもたちが、どのグループにも最低一人ずつ入っている小グループに分かれ、6年生がリーダーとなって司会をする。このとき大人は見ているだけ。

ある日のテーマは「いじめって何」。リーダーの6年生が1年生を指名するが、「わからへん」と言い、だんまりしてしまう。リーダーがたまりかねて「何かゆい」と言ったら泣き出してしまった。「正解はないから、なんでも思ったことを言うたらええねんで。みんなの言うこと、聞いとき」と言い、2年生

の子から考えを出して、6年生まで発表したあとに1年生が「自分がされていやなことは、したら、あかん」と発表した。全校道徳の後には全員が「ふりかえり」シートに授業の振り返りを書く。その6年生は「最初は1年生の子にどうしゃべっていいのかわからなかった。自分は意見を言えるけど、1年生ってこんなんか、と思いました」と書いた。どうすればいいかをみんなで考えるのが全校道徳。

何か突飛なことを言う子がいても否定されず「そういう考え方もありやな」と受け止められる。子どもが発表したことを大人はまとめない。正解を決めつけると正解を言えない子の居場所がなくなるし、自由な発想が生まれにくい。自分と違う意見にも耳を傾け、その相手が意見を言うことを尊重する姿勢は、きっと社会で役に立つ。

■地域に開かれ、地域を変える

大空小学校には、子どもの登下校を見守るボランティア、学校の植物の世話をするボランティア、学校行事で子どもたちを応援するボランティアの人たちがいる。ボランティアは学校に出入りしているうちに、子どもたちの家庭の事情も知っていく。

大空小がボランティアの人を入れる訳は、学校の先生たちはいつか異動してしまう「風の人」だが、地域の人たちはいつまでも子どもたちを見守ってくれる「地の人」だからである。子どもたちは地域の人たちとつながりを持つことができる。地域の人たちから子どもが見守られ、関心を持たれると同時に、地域の人たちも育ち、地域が変わっていく。

現在、大空小学校出身の子どもが大空小学校のボランティアとなり学習支援をしている。人が人を育てて、育った人がまた育てていく。地域の人々のつながりができ、引き継がれていく。つながりによって地域が変わっていく。

最後に、大空小がなくても何かできることはないだろうか。

それは、子どもたちに関心を持つこと。子育て中の親へ温かい眼差しを向けること。「困った子」は「困っている子」かもしれない、「困った親」は「困っている親」かもしれない。自分に何かできることがないか考えてみる。同じような考えを持つ人たちとつながっていくことが大切だと思う。

(記録：會澤直也／小糸公民館)

